



## 気かけあう関係

園長 野中 泉

園の入り口のタッチパネル（※注1）を置く棚を新調しました。これまで使っていた棚の下段が狭くて広報誌や投葉届などの用紙がごちゃごちゃしてしまっていたのと、職員が少ない早朝も事務室のタッチパネルのある窓を開けることにしたので、防犯上もすぐには乗り越えられない高めの棚がいいと考えたのですが、新しい大きな棚の真ん中にパソコンのディスプレイを置いたら、窓から保護者の顔が見えなくなってしまいました。

新調した当日に私たち「あれ？お母さんたちの顔が見えない。これは寂しい」と気づいたのですが、お母さんたちの方も「あれ？顔が見えない、寂しいわ」「これ、中のみんなの顔見えへんくて、変な感じやな」と何人もが、ディスプレイの脇から顔をのぞかせて、そう言って帰りました。翌日には、ディスプレイを棚の端にずらして、どうにか、また顔を見て「おはよう」と言えましたが、私たちと同じ違和感をお母さんたちも感じてくれたことをうれしく思いました。

アトムの事務室は、駐車場と保育室に向かうテラスの通路に向かう2方向全面が窓です。園長の私も、主任も看護師も、事務の職員も、みんな窓に向かって仕事をしています。「おはよう」「おかえり」「さよなら」の短い挨拶はもちろん、「元気？」「髪型変えたね」などのちょっとした声かけや小さなおしゃべりが、朝夕は窓の内からも外からも途切れません。「うっー、いる？」と窓から顔を出して子どもの体調を看護師に相談していくお母さんいれば、「昨日仕事場で腹たつことあったねん」というような愚痴を窓越しに聞くこともあります。逆に何も言わずに足早に去る背中が見えて気になったり、愚図る子どもの泣き声や余裕なく怒鳴る母の声が窓の向こうから聞こえてきて「どした、どした」と私たちが覗きいくこともあるし、反対にお母さんたちの方が「疲れた顔してるよ、大丈夫？」と私たちが窓越しに心配してくれる日もあります。

こんなふうに「声をかけあい」「気かけあう」関係が職員と保護者の双方向にあることが、アトムの大事な土台だと、この一年は、いつもの年よりも強く思わされています。

大阪府の赤信号、緊急事態宣言発令から、保育室への立ち入りは原則大人ひとり、朝夕の用意もできるだけ短時間でお願いしているので、保育室で、保護者と保育士や保護者同士がゆっくりおしゃべりをしていくことが少なくなっています。また以前は頻繁に見た他所の子とも遊んでくれるお父さんや、自分の子だけでなく他の子の世話もあれこれ焼いてくれるお母さんの姿を、今は見る事ができません。感染症対策では仕方がないと思う一方で、タッチパネルの大きなディスプレイが邪魔をして、お母さんたちの顔が見えなくなった時と同じ違和感や寂しさだけでなく、保護者との距離が遠くなるような心もなさを感ずます。

1月は、緊急事態宣言と近隣での感染拡大状況も踏まえ、全クラスの懇談会を中止にせざるを得ませんでした。2月に予定している懇談会もどうなるかわからない状況ですが、こんなふうに、懇談会ができない時を迎えて、改めて、親たちと保育士がただ車座になって話すしをする、それだけの時間の積み重ねが、どれほどアトムの保育を支えてくれていたのかを、思わずにはいられません。

ウィルスとつきあいながら生きる日々は、まだ終息に至らなそうです。まだ、何年か先まで、私たちは、マスクで表情を隠しながら、他人と距離を開けながら「子育て」という、新たな、そしてとても難しい課題と向き合っていかなければなりません。かつて保育研究者の汐見稔幸先生は、アトム共同保育所の実践を記したその著書で「ひとりじゃ子育てできっこない」（※注2）という大事なキーワードを世の中に投げました。それから20年以上を経たこの困難な時代に、これからもアトムは同じ言葉を世に問い続けていかれるのか。何を大事に進むのか。大きな宿題と共に激動の一年を終えようとしています。

※注1 タッチパネル：アトムでは、園児の出席状況をさくらシステムで管理しています。保護者が登降園時にタッチパネルを押します。

※注2 参考書籍：「ひとりじゃ子育てできっこない」 汐見稔幸著 1998年 かもがわ出版